



# 觀音

昭和 61 年 1 月

第 4 号

年 2 回発行  
編集発行

小出 真行

結果だけが尊いのではない  
ほとけに成ろうとするその努力が尊いのである

(秘蔵記)

## 明けまして お目出度うございます

どんな



生きている間は憎まれて、  
きらわれて、死んだら喜ばれる人  
生きておいてもあまり役に立たないが、邪  
魔にもならない。そして死んでも憎まれもし  
ないが、惜しまれもしない。どうでもいい人  
で例えばヌルマ湯でオナラをしたような人、  
(ヌルマ湯でオナラをしたら、自分がくさい  
くらいで他人にあまり影響のない人)  
生きている間、惜しまれ、親しまれる人、  
死んだあと今まで、なつかしがられ、惜し  
がられ、したわれる人。

さあ、あなたはどの様な人になりたいです  
か?、最後の様な人になれますように、お互  
いにおもいやりをもって精進したいのです

舍利子 是諸法空相 不生不滅

不垢不淨 不增不減

(舍利子よ、この諸法は空相にして、  
生せず、滅せず、垢つかず、淨からず  
増さず、減らす)

この「舍利子よ」とは、もちろんお釈迦さ

まの弟子舍利弗に呼びかけているのです。

「この諸法は空相にして」の「諸法」とは、  
この世に存在する（目に映る全てのもの）す  
べての現象のこと、「空相」とは、その現  
象というものは実体（本当の姿）がないとい  
うことを行っているのです。

「生せず、滅せず」とは、空という実体（  
本当の姿）のないものは、生まれもしないし  
滅しもしない永遠のはたらきのことを行って  
いるのです。山岡鉄舟の歌に  
「晴れもよし曇りてもよし

富士の山

もとの姿は変らざりけり」

という歌がありますが、これは富士山という  
ものの美しさは、いつどこから見ても変らな  
いように「美」という実体のないものにいく  
らしさを加減乗除してもその美しさは変わ  
ないもので、空というものはどこにでも含ま  
れているとともに、どれをも包む絶対的な特

性をもつてているのです。

「垢つかず、淨からず」とは、空というも

のは清浄であるとも、不浄であるともいい切  
れないといった意味で、ちょうど澄みきった

鏡のように無色透明で、そのままにしておけ  
ば曇つてくるし、心をこめて磨けば光ってき  
ますが、その鏡というものの本質は変わりが  
ないものなのです。

「増さず、減らす」には、空というものは、  
増すこととも、減ることもないといった意味で  
す。それは、ちょうど池の水のように、石を  
投げ込んだとしたら、波立ち、水量があたか  
も増えたように見えますが、人の体積はひと  
つも変わらないのです。

要約しますと、この世において、全ての存  
在するものには実体（本当の姿）がないとい  
う特性をもつてているのです。その実体（本当  
の姿）は、生じたりすることもなく滅したり  
することもありません。そして汚れたもので  
もなく、汚れを離れたものでもないのです。  
それはまた減ることもなく、増すこともない

ということなのです。これは、人の目にたえ  
ず変化している様に見える全てのものは、そ  
の本質においてはなんの変わりがないとい  
ことを行っているのです。

真言宗の教えに「機根万差」という言葉が  
あります。俗にいう「人それぞれ」がこれ  
にあたります。人というものは、顔や姿かた  
の違うように知能、情操、性格のすべてに  
おいても万人万様なのです。そして知識、感  
情、意志を統一している各々の心のはたらき  
は、その本質において何ものにも代えがたい

「秘密にまた二つの意味がある

一つに衆生秘密

二つには如来秘密である

二教論

真言宗のことを真言密教ともいいますが、  
これは「真言秘密の教え」という意味です。

一般に秘密というと何か公開をはばかるもの  
というように取られがちですが、真言秘密と  
いう場合はそうではありません。これは「お  
おわれている」という意味が秘密の語義な  
です。では何故、真言の教えはおおわれてい  
るものなのかといいますと、お大師さまはこ  
れについて、秘密に衆生秘密と如来秘密の二  
つの意味があると申されています。衆生とは  
もちろんわたしたちの存在を指して、如来と  
は絶対者としての法身大日如来を指している  
のです。

尊いものなのです。それゆえに、仏教ではこれを仮性といいます。この仮性は、誰でもが持っているものであります、自分自身ですら、気が付かないものなのですからましてや相互の仮性を認めようとするところまで至りません。これはお互に愚痴の凡夫であるがためなのです。

お釈迦さまが、お生まれになつた時、「天下天下唯我独尊」と声高らかに唱えたと伝えられていますが、これは人間尊嚴の大宣言なのです。人間というものは一人一人それぞれ尊い心がありその人だけの自己というものをもつてゐるのです。知能や情操や性格には個人差というものがあります。優れた知能をもつている者もあれば、知能はさほどなくても情操の豊かな者もおります。人より二倍も三倍も強い意志をもつていますが情操の干からびた者もいます。しかしそれは相対的なもので、これを基準にしてその人を評価しがちですがそれはとんでもないことなのです。はなはだしい人にいたつては、人の話や世間の噂だけでも、その人を全面的にこうだときめつけかねませんから恐いことなのです。

ともあれ要するに、このかけ代えのない自分自身というものの尊さは、通常自分では気がつきませんが、これが衆生秘密なのです。自分自身が仮性をもつていながらその仮性を知らないでいるのです。例えば小学生に大学

の教育をする人はいないでしょう。小学生には当分の間、大学の教育はお預けですが、しかし、いつまでもその人に大学教育を授けないというのではありません。如来の秘密もまたこれと同じ事なのです。如来がしばらくの間さとりを秘密にして衆生に与えないまでの話で、しかし、いつまでもそれを秘密にしているわけではありません。小学生もいつかは成長して大学教育を受けられるようになると同じように、衆生もまた宗教的に成長したときは如來の慈悲の力が衆生に加わり、衆生の信心のまことがそれを受けるとき、秘密ははじめて開示せられるのです。そして仮性の美しい花はまことの木の実をむすぶことになるのです。

「お地蔵さま」は村のはずれや町の辻に雨の日も風の日も立ちつづけて私達を見守つてくださつてゐる点で私達に最も身近で親しみます。これと同じ事なのです。如来がしばらくの間さとりを秘密にして衆生に与えないまでの話で、しかし、いつまでもそれを秘密にしているわけではありません。小学生もいつかは成長して大学教育を受けられるようになると同じように、衆生もまた宗教的に成長したときは如來の慈悲の力が衆生に加わり、衆生の信心のまことがそれを受けるとき、秘密ははじめて開示せられるのです。そして仮性の美しい花はまことの木の実をむすぶことになるのです。

この「お地蔵さま」は、お釈迦さまが入滅せられた後、次に五十六億七千万年の後に弥勒菩薩がお出になられるまでの間、弥勒菩薩にかわつて法を説くために、この世に出られた仏さまなのです。人間はこの世での行(業)の報いによって、死んだのちに六つの世界にそれぞれ生まれ変わるとされています。これを「地獄」「餓鬼」「畜生」「修羅」「人間」「天上」の六道といっていますが、この内の「地獄」「餓鬼」「畜生」の三つの世界は苦しみだけの世界です。こうした地獄にも「お地蔵さま」は焼れて、私達の苦しみを救つて下さるのであります。

皆様は「さいの河原」をご存知ですか、「さいの河原」は、この世に日の目を見れなかつた子供や幼くして亡くなった子供たちが行く地獄です。こうした子供たちはこの世で善行を積む事が出来なかつたり、幼くして死ぬ事によつて父母を悲しませたのです。そしてその罪によつて「さいの河原」という地獄で苦



しんでいるのです。子供たちは河原で石を積んで遊戯している様に見受けられます。これはこの世で出来なかつた善行を石の仏塔を積む事によつて償おうとしているのです。しかししながらその子供たちの願いは、仏塔の完成まであとわずかというときに、その度に地獄の鬼によつて無残にも打ち碎かれてしまい、その上鬼たちは鉄の棒で子供たちを責めたてます。この様な悲惨な「さいの河原」にも現われて子供たちを救つて下さるのが「お地蔵さま」なのです。

本当は仏さまの資格がありながら、私達を救つて下さるためにあえてお坊さまの姿をして救いを求める者のところへ来て下さるのであります。「お地蔵さま」が右手に持つて下さるものは六波羅密を示して、錫杖は上部に小さな環が六個ついています。それぞれ布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧という菩薩の修行の六つの徳目なのです。その錫杖を地上に立くと、その響きによつて悪獸毒蛇はたちどころに退散するといわれ、左手に持つている宝珠は如意宝珠といい、意のままになんでも与えることの出来る宝珠で、「お地蔵さま」の広大無比のお力を示しています。

そして私たちを暖かく包んでくれる「お地蔵さま」は、今日では「子育地蔵」「子安地蔵」「笠地蔵」「延命地蔵」「田植地蔵」などと色々の名前が付けられて親しまれているのです。

この世に親なくして生まれた者はありません。一人の人間がこの世に生まれてくるためには父と母があり、そしてその父と母にそれぞれの父と母があります。この様に逆のぼっていきますと三十代前にはなんと十億もの男女が五億組の家庭をもつていたことになりますので驚くべきことです。しかしその五億組



の家庭全部が私たちに関係しているのではありません。私たちは、それぞれ直接に自分の家系を継いできた先祖代々の遺伝をうけ、私という一人の人間がここに生まれてきたのでありますから、先祖の良し悪しが私の良し悪

しとなり、当然私の良し悪しがやがて我子の良し悪しとなつて現われてくるのですからその因果関係は絶対に無視する事は出来ません。

そこで私たちは先祖の追善供養をつとめ、悪を善に、禍いを福に転じる行ないが必要になつてくるのです。つまり先祖は、現在この世に生をもつていて自分自身の生命の根源なります。従つて、この根を枯らしては太らうとする幹も、延びようとする枝や葉も衰えて

かされているという尊さに気付き、徳を積むような日々を送りたいものですね。

命を清めんとすることは、現在の我生命の価値を高め、子孫を先祖より、より良いものにしようとする意志が働いているので、そこに追善とか追福という言葉の意味が発見されるのです。良いにしても悪いにしても、現在ここに自分という者が生きている以上、祖先を無視することは出来ないので、自分の生命の根源ともいえる先祖に対して恩恵を感じ、報恩のために善行を積むことによって、その家門が繁榮し、子孫の幸福が招き寄せられるにほかならないのです。何故かといふと、元来先祖の人たちも子孫の幸福を願つてやまなかつたことでしようから、子孫たるもののが先祖の意志を活かして行こうと精進するところに本当の道徳心の温床があるような気が致します。

なにはともあれどうぞ皆様も、この世に生かされているという尊さに気付き、徳を積むような日々を送りたいものですね。

## 編集後記



皆様方の、考え方や人生論等を記載致したく思いますので、どうぞ申し出て下さい。